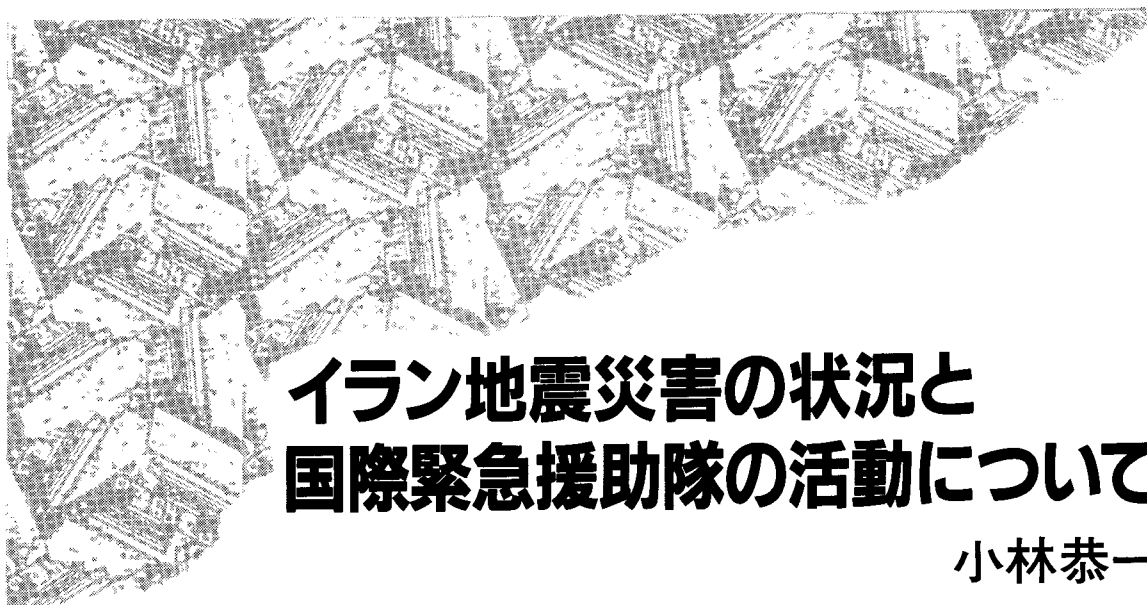




イラン地震災害の状況と 国際緊急援助隊の活動について

小林恭一

1 はじめに

去る6月21日早朝（現地時間21日深夜）に発生したイラン北西部を震源とする地震の後、日本政府はイラン国政府からの要請に応じて「国際緊急援助隊」を派遣することとなった。筆者は急きょ編成された国際消防救助隊の責任者として「総括官」に任命され、イランに赴き救助活動を行うチャンスを得たので、本稿を借りて、イラン地震災

害の状況と緊急援助隊の活動状況や建物構造等について報告することとしたい。

2 イラン地震災害の状況

イラン地震災害の状況について確定されたデータはないが、各種の情報を取捨選択してみると、おおむね次のとおりと考えられる。

・地震発生日時 1990年6月21日0時27分（日本時間21日午前5時57分）頃。

・震源地 カスピ海南西部の州都ラシュトの南西約35kmの地点（北緯37.03度、東経49.39度）（図1）。

・地震のエネルギーM7.6（その後M5クラスの余震が多発）。

・地震による被害（6月30日テヘランタイムスによる）死者約5万人、負傷者約20万人、家屋を失った人約50万人。

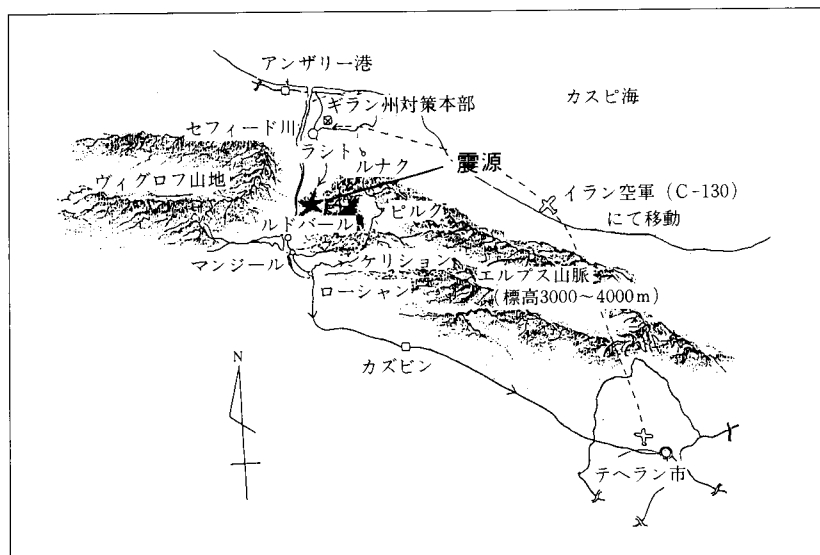


図1 イラン地震震源付近図

我々の見た範囲では、ラシュトでは1～2割の建物が壊れているだけであつたが、震源地に近い谷あいの町ルードバールやマンジールではほとんどの建物が倒壊しており、辛じて建っているものもひび割れがひどく危なくて近寄れない状態であつた。また、震源地近くの山岳地帯には、村の建物が完全につぶれて土砂崩れの現場のようになっている所も多く、その下敷きになって死亡した人の多いことをうかがわせた(写真1、2)。



写真2 土砂崩れの現場のようになった山間部の村(ケリション)

3 国際緊急援助隊の活動内容

1) 編成

今回イランに派遣された国際緊急援助隊は、外務省職員を団長として、救助チーム12人(消防、警察各6人)、医療チーム8人、調整員等2人の合計23人から成る総合チームである。これは、救助チームが瓦礫の下から救い出してきた負傷者を医療チームの医療行為によって救命しようという意図によって編成されているもので、救助チームだけ、または医療チームだけという単独編成に比べ



写真1 最も被害の大きかったマンジールの倒壊した建物

てはるかに強力な総合チームである。

2) 現地到着まで

地震発生の翌22日未明には、緊急援助隊の派遣とそのリストから搭乗する航空便まで決定されていたが、13時間余りで行ける成田～テヘラン直行便は次の便までかなり時間があいていたため、結局、ロンドンとフランクフルトで2回乗り継いでテヘランに入る22日22時30分発のJALに搭乗することになり、成田からテヘランまで31時間を要してしまった。

また、テヘランに着いてからも、道路が崖崩れで寸断されていたり、被害が大き過ぎてイラン政府の情報伝達機構や意志決定機構が大混乱していたりしたため、日本チームがイラン空軍の軍用機とバスを乗り継いでラシュトに入り、当地の病院での活動を懇請された医療チームと別れて、最も被害の大きかったマンジールの国際救助隊のテント村に入ったのは、テヘランに着いてからさらに44時間後であった。

この間に在イラン日本大使館等の関係者が払った努力は大変なもので、同じ条件のもとでこれ以上早く現地入りできる方法はなかったと思うし、

表1 救助チームの活動内容

1 マンジールでの活動

- (1) 6月25日(月)夜8:00過ぎに、マンジールの軍の施設内にある各国救助チームのテント村に到着。野営。
- (2) 26日(火)朝、「マンジールでの救出活動はほぼ終わりに近づいているが、マンジールの東側の山岳地帯に未調査の村が200以上ある。現在ヘリコプターで調査中なので、生存者がいそうなら行ってもらうから、待機して欲しい」旨イラン側から要請あり。
- (3) 待機中に、マンジールとルードバールの被害状況調査。キャンプ近くのアパートの崩壊現場で救出活動。生存者発見できず。
- (4) 午後、「ヘリコプターで現地に入ってもらうかもしれないので、すぐ飛び立てるように準備して待機してほしい」とのイラン側の指示あるも、結局要請なし。
- (5) 27日(水)朝7:30からフランスチームと双方の機材を展示して交流中、イラン側より生存の可能性のある未復旧の村が山岳地帯の奥地でマンジールから90kmの地点にあるので、直ちに出發してほしい旨の連絡あり。村名「ビルク」、標高2,500m。
- (6) 10:00前、マンジール(標高1,500m)出發。武装兵士に護衛され、険しい山岳地帯をバスとトラック2台で山越え。路肩が地震で地割れし、所々崩れている絶壁の淵の山道をぬけ、3,000m級、4,000m級の山々を越えて、3:15、ビルクにたどり着く。ほとんど「アフガン・ゲリラ」の世界。

2 ビルクでの活動

- (1) 到着後直ちに現場調査。「生存者の可能性がある」という住宅の崩壊現場を3つほど調査するが、生存可能性と2次災害の危険性から判断して、救出対象を一件に特定。救出方法を定めた時点で日没。いずれにしろ、建物のつぶれ方がひどいので、生存者のいる可能性は小さいと判断。軍の補給基地で野営。
- (2) 28日(木)朝6:30、キャンプを出發。前日の打合せどおり救出活動を開始。生存者がいることを考慮して、現地で調達したパワーシャベルとブルドーザーを慎重に用いながら救出活動。

◎救助対象はシェリフィー家というバン屋。父母と子供3人、祖母の6人家族。地震の際、母親と子供2人は逃げたが、残りの3人は逃げ遅れた。祖母の遺体は一部発見されている。父と子供1人が生き埋めとのこと。

- (3) 地震時に発生した火災が崩れた土砂に閉じ込められており、残骸を取り除くうちに発熱を強める。放水して冷却をしながら活動するが、発熱がひどく、そのまま放置すると再燃火災となる危険性があるため、救出活動を危険排除活動に切りかえる。
- (4) 17:30、高熱で遺体も白骨化してバラバラになっている可能性が高いため、遺体搜索を断念。全員黙禱をして活動を終了。野営。
- (5) 29日(金)朝7:35、ラシュトへ向けビルク出發。

救助チームとしては感謝するのみであるが、「もう少し早く着いて活動しなかった」という思いがあることは否定できない(もともと、崩壊すると土砂崩れの現場のようになってしまう建築構造のため、日本チームより少し早く現地入りしていたフランスとイギリスの救助隊も生存者の救出には成功していないので、結果は同じことだったと思うが。)

3) 救助チームの活動内容

25日(月)の夜マンジールに入ってから、ビルクでの救助活動を終えた28日夕刻までの救助チームの活動内容は、表1のとおりである(写真3)。

生存者の救出ができなかったことは残念ではあるが、地理的なハンディにもかかわらず各国救助隊と前後して現地入りして見劣りしない活動ができたこと、テントで野営しながら救助活動を行うという初めての経験を1人の故障者もなく乗り切ることができたこと、各国救助隊のなかでは最も奥地まで入って救助活動が行えたこと等は大きな収穫で、法律制定後初の救助チームとしての目的は十分に達することができたのではないかと自負している。

4 各国救助チームの様子

今度のイラン地震は、被害がきわめて大きかったので、日本以外にも多くの国が救援チームを派遣している。筆者が確認しているだけでも、フランス、イギリス、スペイン、スイス、西ドイツ、



写真3 日本救助チームによる生存者の搜索(ビルク)

イタリア、ソ連（他に近接のアゼルバイジャン共和国とバクー市が独自に救援隊を派遣）、キューバ、シリアなどであり、各国チームのテント村のあったマンジールのイラン軍施設は、さながらオリンピック村の感を呈していた。

特に壮観だったのはフランスチームで、犬18匹を含む2百数十人の大部隊が専用機でテヘランまで飛んできていた。我々同様、入国後現地入りするのに相当苦労したようではあるが、テヘラン入りが早かったため、結局一番早く現地入りして活動を行っていた。

日本チームは、27日早朝にフランスの救助チームと資機材等を展示しあって交歓したが、救助資機材そのものは日本チームとあまり変わらないものの、

①訓練された犬2匹と医療班2人を含む13人で1小隊、3小隊と司令部門合わせて60人で一編成となるチーム編成

②各小隊ごとに「6日間外部からの補給なしで独立して救助活動が行える資機材」がコンテナにバックされており、出動時にはそのコンテナを積み込むだけですぐに救援に飛び立てる体制

③活動現場で自由に動き回れるバギー車のような救助専用車(写真4)

④偵察用のウルトラライトプレーン

⑤内部に机や椅子を持ち込める大型テントと野営用の簡易ベッド(写真5)

など、今後の日本チームの在り方を検討する場合に参考になりそうな点が多々あった。

逆にフランスチームが感心したのは、日本チームのファイバースコープである。これは、医療用

のファイバースコープを改良して、瓦礫の間に差し込んで中をのぞき、生存者の有無を確認したり、内部に空気を送ったりすることができる日本独特の救助機材で、1986年10月に日本の国際消防救助隊が初めて海外で救助活動を行ったエルサルバドルでの活動以来、さらに改良を加えて高性能になっているためもあり、「すぐに売って欲しい」という冗談がでるくらい関心が高かった。またイギリス隊は、テント村の中にパラボラアンテナ(写真6)を立て、インマルサット衛星を使って直接国際電話ネットワークにアクセスし、本国やテヘランのイギリス大使館とコンタクトしていた。筆者も日本に連絡をとらせてもらったが、国際電話をかける要領でダイヤルすると、2〜3秒で消防庁がでたのには感激した。なにしろ、マンジールからテヘランまでの電話は不通になっているし、テヘランから東京までの国際電話でも、昼間だとまず2時間は待つ必要があるからである。

それ以外の国は、救急車10数台を連ねて陸路医療チームを送ってきたアゼルバイジャンとバクーを除けば、人数的にも装備面でも日本の緊急援助隊と似たりよったり、というところであり、日本

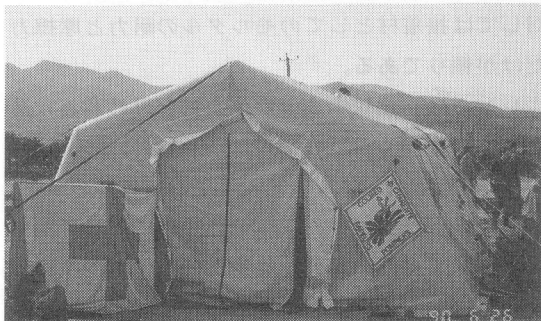


写真5 フランス救助チームの大型テント(マンジール)



写真4 フランス救助チームの救助専用車(マンジール)



写真6 テント村に設置されたイギリス救助チームのパラボラアンテナ(写真中央)(マンジール)